

# 神の存在論的証明の歴史的考察 (1)

草 野 章

## Eine historische Forschung der ontologischen Gottesbeweise (1)

KUSANO Akira

今となっては最早哲学の中心問題から外れた観のある「神の存在論的証明」だが、その歴史は中世に遡り（尤もその原初的形態は古代ギリシアのパルメニデスの哲学に見出されるであろう）、アンセルムスの存在論的証明を継承したデカルトが自らの哲学体系を支える柱石として以降、近世哲学における主要なトピックのひとつであったことは疑いえない。

周知の如く、これを妥当と見做す哲学者（デカルト、スピノザ、ライプニッツ等々）もいれば、「存在は述語ではない」とのテーゼを以てこれを否定した哲学者（カント）もいた訳であるが、本稿ではまず歴史的な流れを少し追ってみようと思う。

—

シンプリキウスによる、アリストテレスの『天体論』の注釈では、以下の宇宙生成の三つの証明がフィロボヌス (490-570 A.D.) の失われた著作（『アリストテレスに抗して』 *Contra Aristotelem*）に帰せられるという<sup>(1)</sup>。

### 論証 1

1. もし宇宙が永遠だとすると、非永遠物が生成する無限系列が、如何なる非永遠物の生成にも先立つであろうに。
2. 無限系列は越えられない。
3. (故に) 宇宙は永遠ではない。

## 論証 2

1. もし宇宙が永遠ならば、過去における生成が無限回とあったことになる。
2. 生成の回数は増加している。
3. 無限の回数は付加されえない。
4. (故に) 宇宙は永遠ではない。

## 論証 3

1. 諸惑星や固定された星々の回転数は互いの倍数になっている。
2. (故に) もし宇宙が永遠だとすると、倍数を変えながらの、過去における無限回の回転があることになるだろうに。
3. 無限数は倍加不可能である。
4. (故に) 宇宙は永遠ではない。

これらの論証は中世のイスラム哲学者達及びユダヤ哲学者達によって取り上げられ、イスラム神学の以下の宇宙論的三段論法の支えとなっているとの指摘がある<sup>(2)</sup>。

1. 存在を開始するものはその原因を持つ。
2. 宇宙は存在を開始した。
3. (故に) 宇宙はその原因を持つ。

いわゆる、神の存在の「宇宙論的証明」の原型とでも言えるものだが、ここでその妥当性を検証する必要は無いし、論証 1、2、3 が上のイスラム神学の宇宙論的三段論法に本当に支えを与えているのかどうかという問題<sup>(3)</sup>を検討する必要も無いであろう。

無限概念に関する研究の進歩や、カントに見られるような宇宙論的証明の認識論的吟味等を考慮しなければ、このような「証明」の「妥当性」を論じても殆ど意味が無いと思われる。最初の神の存在証明は宇宙論的証明であったことが確認されればそれで充分であろう。

## 二

神のア・プリオリな存在論的証明は、周知の如くカンタベリーのアンセルムス (1033-1109 A.D.) に始まる。その核心となるのが『プロスロギオン』第2章である。哲学史におけるその重要性に鑑み、先ずそのテキストの全文を示そう<sup>(4)</sup>。

Capitulum II  
Quod vere sit deus.

Ergo, domine, qui das fidei intellectum, da mihi, ut quantum scis expedire intelligam, quia es sicut credimus, et hoc es quod credimus. Et quidem credimus te esse aliquid quo nihil maius cogitare possit. An ergo non est aliqua talis natura, quia »dixit insipiens in credo suo: non est deus«? Sed certe ipse idem insipiens, cum audit hoc ipsum quod dico: ,aliquid quo maius nihil cogitari potest<sup>4</sup>, intelligit quod audit; et quod intelligit in intellectu eius est, etiam si non intelligat illud esse. Aliud enim est rem esse in intellectu, aliud intelligere rem esse. Nam cum pictor praecogitat quae factururus est, habet quidem in intellectu, sed nondum intelligit esse quod nondum fecit. Cum vero iam pinxit, et habet in intellectu et intelligit esse quod iam fecit. Convincitur ergo etiam insipiens esse vel in intellectu aliquid quo nihil maius cogitari potest, quia hoc cum audit intelligit, et quidquid intelligitur in intellectu est. Et certe id quo maius cogitari nequit, non potest esse in solo intellectu. Si enim vel in solo intellectu est, potest cogitari esse et in re, quod maius est. Si ergo id quo maius cogitari non potest, est in solo intellectu: id ipsum quo maius cogitari non potest, est quo maius cogitari potest. Sed certe hoc esse non potest. Existit ergo procul dubio aliquid quo maius cogitari non valet, et in intellectu et in re.

(訳)<sup>(5)</sup>

第二章  
神が真に存在したもうこと

されば、信仰に知性を与えたもう主よ、われらの信ずるが如く汝は存在したもうこと、且つ汝はわれらの信ずるが如きものでありたまうことを私が知解することを、汝が益ありと思召さる限り、私に許したまえ。たしかにわれらは、汝が、それよりも大なるものは何ものも考えられ得ざる如き或るものでありたまうことを、信じている。それとも「愚かなるものが心のうちで神なしと言った」のであるからして、何かそのような自然が決して存在しないのであろうか。けれどもたしかにこの同じ愚かなるものも、わが言うこの言葉を、即ちそれよりも大なるものは何ものも考えられ得ざるものと言うことを聞く時には、彼が聞くものを知解する。そして彼が知解するものは、仮令彼はそれが存在していることを知解しないとしても、彼の知性のうちには存在しているのである。蓋しものが知性のうちに存在することと、ものの存在することを知解することは、異なっているからである。例えば画家は將に描こうとするものを先ず考案する時、たしかにそれを知性のうちにもってはいるが、しかし決して存在するものであると知解しているのではない。彼はまだそれを描いたのではないからである。しかし既に彼が描いてしまった時には、それを知性のうちにも有っているし、それが存在することも知っている。既に造ってしまったのであるからである。それ故に愚かなるものと雖も、それよりも大なるものは決して考えられ得ないような或るものが、たしかに知性のうちには存在することを承認す

るであろう。蓋しこれを彼が聞く時に彼はそれを知解し、彼が知解するものは何であっても、知性のうちに存在するからである。またそれよりも大なるものが決して考えられ得ないようなそのものが、ただ知性のうちにしか存在しないことは、たしかに不可能である。何となれば知性のうちにだけは、たしかに存在するとすれば、それは実象のうちにも亦存在すると考えられることが出来るからである。この方が「ただ知性のうちにしかあらぬものよりも」大であるからである。それ故にそれよりも大なるものが考えられ得ないものが、ただ知性のうちにしか存在しないとするならば、それよりも大なるものが考えられ得ないそのものが、それよりも大なるものが考えられ得るものとなる。けれどもたしかにかくなることは不可能である。それ故に疑もなく、およそそれよりも大なるものが決して考えられ得ないものは、知性のうちにも存在しているが、また実象のうちにも存在しているのである。

この存在証明に関する意見は大部分が否定的であるとされる。それどころかここに見られるようなア・プリオリな神の存在証明はありえないとまで主張されるのだ<sup>(6)</sup>。しかし果たしてそうか。近世においてこの証明を継承したデカルトを始めとして、スピノザやライプニッツがその妥当性を認めた「ア・プリオリな神の存在証明」は果たして無下に斥けられるべきであろうか。アンセルムスの「ア・プリオリな神の存在証明」に対して真先に異議を唱えたのは、周知の如く、アンセルムスと同時期に生きた修道士ガウニロ (Gaunilo) であるから、先ず彼の異議を見てみようと思うが、ここでは最もよく知られている、「失われた島」の例に止めておこう。

*Exempli gratia: Aiunt quidam alicubi oceani esse insulam, quam ex difficultate vel potius impossibilitate inveniendi quod non est, cognominant aliqui ‚perditam‘, quamque fabulantur multo amplius quam de fortunatis insulis fertur, divitiarum deliciarumque omnium inaestimabili ubertate pollere, nulloque possessore aut habitatore universis aliis quas incolunt homines terris possidendorum redundantia usquequaque praestare. Hoc ita esse dicat mihi quispiam, et ego facile dictum in quo nihil est difficultatis intelligam. At si tunc velut consequenter adiungat ac dicat: non potes ultra dubitare insulam illam terris omnibus praestantiorē vere esse alicubi in re, quam et intellectu tuo non ambigis esse; et quia praestantius est, non in intellectu solo sed etiam esse in re; ideo sic eam necesse est esse, quia nisi fuerit, quaecumque alia in re est terra, praestantior illa erit, ac sic ipsa iam a te praestantior intellecta praestantior non erit; — si inquam per haec ille mihi velit astruere de insula illa quod vere sit ambigendum ultra non esse: aut iocari illum credam, aut nescio quem stultiorem debeam reputare, utrum me si ei concedam, an illum si se putet aliqua certitudine insulae illius essentiam astruxisse, nisi prius ipsam praestantiam eius solummodo sicut rem vere atque indubie existentem nec ullatenus sicut falsum aut incertum aliquid in intellectu meo esse docuerit.*<sup>(7)</sup>

(訳)

例えば或る人々が大洋のどこかに或る島があると言うとしよう。人々はそれを発見することが困難であり、或いはむしろ——存在しないのであるから——不可能であることのために、その島に「失われたる」と言う名を冠している。そしてその島は、幸福なる島について語られているよりも遙か以上に、あらゆる富や快樂を、量り切れないほどゆたかに有ち、且つ如何なる所有者も住民もいないのであるから、財産となすべきものの豊富な点では、人民が居住している他の凡ての土地を全く凌駕していると、その人々は語っているのである。そういう訳で誰かが私にその島は、そういう風であると言うとしよう。私もその言われたことを、その中には少しもむずかしいものがないから、容易に知解するであろう。しかしその時、その人が、恰も当然の帰結であるかのように、こう附言するでしょう。君はあらゆる土地よりも優越したかの島が、どこかで実象のうちに真に存在することを、最早疑うことは出来ない、それが君の知性のうちにも亦存在していることを、君は疑わないのであるから。而してただ知性のうちにだけでなく、実象のうちに亦存在することの方が、より優越的な存在であるから、その島は必然的にそういう風に存在していなければならぬ。それは、若しそうでないとすれば、他のどんな土地にもせよ、実象のうちにあるものの方が、その島よりも優越していることになるから、且つまたかくして、君がより優越していると知解している島の方が、より優越してはいないことになるからと——。さて私は言うが、若しその人が、かの島について、それは真に存在するのであるから、最早疑わべきではないと言うことを、上述の言葉によって私に論証しようと欲するならば、私はその人が笑談を言っていると思うか、或は、私かその人か、何れか一方が愚かであると見做さざるを得ないであろう。即ち若し私が彼に譲歩すれば私が愚かであり、また若しその人が自分はその島の存在性を何等かの確実性によって論証したと思い、それよりもさらに、その島の優越性そのものは、全く「それが」真に且つ不可疑的に存在する実象の如くに、私の知性のうちに存在するのであって、決して何か誤った不確実なものに、私の知性のうちにあるのではないことを教えなければ、その人の方が愚かなのである。<sup>(8)</sup>

「それよりも大なるものが決して考えられないもの」というアンセルムスの神概念は「最も豊饒な島」と変わるところが無く、それゆえ「それよりも大なるものが決して考えられないもの」が知性の内にだけでなく、事象の内にも存在しなければならないというのであれば、同じように「最も豊饒な島」も知性の内にだけでなく、事象の内にも存在しなければならない筈である、というのがガウニロの異議であろう。これはアンセルムスの「それ故に愚かなるものと雖も……また実象のうちに存在しているのである」の部分の次のように言い換えてみると解りやすくなる<sup>(9)</sup>。

それ故に愚かなるものと雖も、それよりも大なる島は決して考えられ得ないような或る島が、たしかに知性のうちには存在することを承認するであろう。蓋しこれを彼が聞く時に彼はそれを知解し、

彼が知解するものは何であっても、知性のうちに存在するからである。またそれよりも大なる島が決して考えられ得ないような島が、ただ知性のうちにしか存在しないことは、たしかに不可能である。何となれば知性のうちにだけは、たしかに存在するとすれば、それは実象のうちにも亦存在すると考えられることが出来るからである。この方が「ただ知性のうちにしかあらぬものよりも」大であるからである。それ故にそれよりも大なる島が考えられ得ない島が、ただ知性のうちにしか存在しないとすれば、それよりも大なる島が考えられ得ないその島が、それよりも大なるものが考えられ得る島となる。けれどもたしかにかくなることは不可能である。それ故に疑もなく、およそそれよりも大なるものが決して考えられ得ない島は、知性のうちにも存在しているが、また実象のうちにも存在しているのである。

これに対してアンセルムスは次のように答えている。

Sed tale est, inquis, ac si aliquis insulam oceani omnes terras sua fertilitate vincentem, quae difficultate immo impossibilitate inveniendi quod non est, ‚perdita‘ nominatur, dicat idcirco non posse dubitari vere esse in re, quia verbis descriptam facile quis intelligit. Fidens loquor, quia si quis invenerit mihi aut re ipsa aut sola cogitatione existens praeter ‚quo maius cogitari non possit‘, cui aptare valeat conexionem huius meae argumentationis: inveniam et dabo illi perditam insulam amplius non perdendam. Palam autem iam videtur ‚quo non valet cogitari maius‘ non posse cogitari non esse, quod tam certa ratione veritatis existit. Aliter enim nullatenus existeret. Denique si quis dicit se cogitare illud non esse, dico quia cum hoc cogitat, aut cogitat aliquid quo maius cogitari non possit, aut non cogitat. Si non cogitat, non cogitat non esse quod non cogitat. Si vero cogitat, utique cogitat aliquid quod nec cogitari possit non esse. Si enim posset cogitari non esse, cogitari posset habere principium et finem. Sed hoc non potest. Qui ergo illud cogitat, aliquid cogitat quod nec cogitari non esse possit. Hoc vero qui cogitat, non cogitat idipsum non esse. Alioquin cogitat quod cogitari non potest. Non igitur potest cogitari non esse ‚quo maius nequit cogitari‘. <sup>(10)</sup>

(訳)

しかしかくの如き説は、恰も、誰か或る人が、豊饒である点では一切の土地に勝っている大洋上の島を——この島は、発見することが困難であり、否、存在しないのであるから、不可能であることのために、「失われたる島」と称せられているのである——言葉をもって記述せられれば、誰でも容易に知解し得るのだからと言う理由で、それが実象のうちに真に存在することは疑われ得ないと言うようなものである、と貴君は言うのである。しかし私は確信をもって言おう。「それよりも大なるものが考えられ得ないもの」は別であるが、若し誰か私に実象的にか或はただ思惟的にか存在するものを、何か考え出してくれ、それに私のこの一連の論証を適用することが出来るものがあるならば、私は失われ

た島を発見し、復た失われるようなことのないために、それをその人に与えよう。

けれども、既に明かに見られたように、「それよりも大なるものが考えられ得ないところのもの」は、真理の非常に確実なる理由によって存在しているのだから、存在しないと考えられることは不可能である。実際、さもなければそれは全然存在しないであろう。

最後にまた、若し、自分はそれ「よりも大なるものが考えられ得ないもの」を、存在しないと考えると言う者があるならば、私は次のように答えよう。その人はこのこと「即ちそれが存在しないということ」を考える時に、何かそれよりも大なるものが考えられ得ないところのものを思惟しているか、それとも思惟していないかである。若し思惟していないとすれば、彼はそれが存在しないとも思惟していないのである、彼は思惟していないからである。しかし若し思惟しているとすれば、彼は何か或るものをたしかに思惟しているのである、それは存在しないと思惟せられることが出来ないものである。と言うのは、若し存在しないと思惟せられることが出来るものだとなれば、それには始めと終りとがあると思惟せられることも出来る筈である。ところがそう思惟することは不可能なのである。してみればそれを思惟する者は、存在しないと考えられることが不可能なものを、何か、思惟しているのである。しかしこれを思惟する人は、そのものが存在しないと思惟しているのではない。さもなければ彼は思惟せられることの出来ないものを思惟することになる。だから人は、それよりも大なるものが考えられ得ないところのものを、存在しないと思惟することは不可能である。<sup>(11)</sup>

おそらく問題は、論証の形式性にあるのではなく、「それよりも大なるものが考えられないもの」、すなわち、後に「最完全存在者」の概念に定式化されることになる、その概念の特異性にあるのだろう。だから、「それよりも大なるものが考えられないもの」と「最も豊饒な島」とを単に入れ替えて、その形式的整合性を論じて<sup>(12)</sup>殆ど意味が無いと思われる。

存在論的証明の創始者アンセルムスと修道士ガウニロとの間の論争において、先ず以て看取しなければならないのは、神のア・プリオリな存在論的証明の成否の核心となる部分——神を構成する諸々の完全性のひとつに「存在」もまた算え入れられるか否か——を廻る、二人の対立なのである。

(続く)

## 【註】

- (1) The Oxford Handbook of Medieval Philosophy, ed. by John Marenbon, Oxford University Press 2012, p.688.
- (2) ibid.
- (3) ibid., pp.689-690.
- (4) S.ANSELMI OPERA OMNIA TOMUS PRIMUS, Stuttgart-Bad Cannstatt 1984, pp.101-102.
- (5) 『プロスロギオン』、長沢信寿訳、岩波文庫、1987年第2刷、24～26頁。

旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。

- (6) The Oxford Handbook of Medieval Philosophy, p.691.
- (7) S.ANSELMI OPERA OMNIA TOMUS PRIMUS, p.128.
- (8) 『プロスロギオン』、77～78 頁。
- (9) The Oxford Handbook of Medieval Philosophy, p.691.
- (10) S.ANSELMI OPERA OMNIA TOMUS PRIMUS, p.133.
- (11) 『プロスロギオン』、91～93 頁。
- (12) The Oxford Handbook of Medieval Philosophy, pp.691-692.

(くさの あきら 本学准教授)